

Title	日墨協会・日墨交流史編集委員会編, 『日墨交流史』
Sub Title	Nichi-Boku Kyokai ed., Nichi-Boku koryu-shi, Tokyo, 1990
Author	赤木, 妙子(Akagi, Taeko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.4 (1991. 7) ,p.198(602)- 205(609)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910700-0198">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910700-0198</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日墨協会・日墨交流史編集委員会編

『日墨交流史』

赤木 妙子

本書は、四百年に渡るメキシコ（以下、原音による本書の表記に従い、メヒコとする）と日本との交流を記述した一二〇〇頁に及ぶ大著である。五部構成をとり、ヌエバ・エスパニーヤ時代から現代までを俯瞰する。以下、その構成に従って日墨交流の流れを追いつながら、本書の内容と特徴を紹介してゆく。

一、『日墨交流史』の記載内容とその特徴

第I部 メヒコ・日本交流前史

両国の正式な国交のはじまりである一八八八年の日墨修交通商条約締結までが、第I部の記述範囲である。交流の端緒となった千葉県御宿へのガレオン船漂着（一六〇九年）、一五九七年に長崎で殉教した二十六聖人の中の墨国人神父の存在、支倉常長一行のアカプルコ上陸（一六一四年）、鎖国中の一八四一年に漂流民としてメヒコに渡った栄寿丸乗組員などに言及する。開国以降については、明治初年の日本の通貨市場に現れたメヒコ銀貨と、金星の太陽面通過観測の為来日したコヴァルビアス一行（一八七四年）に触れる。何れも、これまでの様々な両国関係史中で語られてきたことのおさらい程度の記述で、目だつて新しいことは無い。また、日墨修交通商条約に関して、今日では自明の事となっている「機密特別條款」〔『日本外交文書』

第二十一巻pp. 138-139〕の存在に全く言及していないのは、寧ろ後退と言えらるだろう。

しかし、興味深いのは、開港直後の一八五〇年代末には米大陸に日本人芸人が居たと言われ、そうした芸人の何人かはメヒコまでやって来ていたことを紹介する件である。「明治維新そうそう武士時代の遺物であるチョンマゲを戴き、一行三名アメリカより漂然とメキシコに流れ、曲芸師としてチョルラ市へ出演」(p. 88) していたという「ルイス吉松」を、殖民候補地調査の為にメヒコを訪れた榎本武揚の甥龍吉の書翰(p. 84)に現れた「軽業・手品」を演じる三人の日本人の内の「速綱由松」に比定する。更に、米国カリフォルニア州の記録にある「大阪の芸人早竹虎吉の一座が渡米」(p. 81) という記述にも着目し、一八六七年にドイツ人興行師に伴われて渡米し、アメリカ各地を巡業した二十八人からなる日本人芸人一座が、その後解散、改めて一座を組んだ「由松」以下三名が一八七四年、メヒコに入った(p. 88) という史実を明らかにしている。留学や政府間交渉の為の渡米者には、従来から十分な考察がなされていたが、「西洋見たさの一心」や「金儲けを目的に」(p. 80-81) 渡米した民間人が少なからず存在し、そこに外国人の関与（芸人一座の様に興行師に連れられたり、あるいは、外国人の従僕となる等）があったという事実は、今後の研究の対象たりえる問題である。

第II部 日本人メヒコ移民史

本書の中心を成す部分であり、その中が更に六章に分けられている。

### 第一章 V 榎本殖民に何が起こったか

日本人による最初のメヒコ集団移住は、榎本武揚の音頭で始まったことから、榎本殖民団と呼ばれる。一行35人がメヒコ南部のチャパス州に入殖したのは一八九七年のことであったが、数年を経ずして崩壊していく。同章では、その過程とその後の一行及び同殖民地の動向を詳細に記述している。

榎本殖民の始まりから解散迄の経緯に関しては、角山幸洋氏の詳細な研究〔「榎本武揚とメキシコ殖民移住(1)〜(5)」『関西大学経済論集』34巻6号〜35巻5号・一九八五〜八六年／一九八六年、同文館より単行本化〕があり、本書の記述もそれに負うところが大きい。寧ろ本書で圧巻なのは、殖民団解散後の一行の行動を語る「日墨協働会社興亡史」以降(pp. 170〜)の記述である。榎本殖民団には、契約移民の他に、自己資金で殖民する自由移民が六名加わっていた。その中の宮城農学校の同級生であった照井亮次郎以下三名が中心となつて「三奥組合」という組織がつくられ、これが発展して「日墨協働会社」となった(一九〇五年)のである。

同会社は「私有財産の禁止」と「日墨融合」を基本理念として掲げていた。「日墨融合」の精神は、具体的には、メヒコ婦人との結婚(全社員が実践 p. 179)や、アウロラ小学校を建設しての子弟教育(ここではローマ字による日本語教育が行われた。メヒコと日本という二つの文化を理解する日

系人を育てることを目指してのことだという p. 209)、『西日辞典』の編纂など(pp. 208〜)を通して表わされた。経営的にも「アメリカ合衆国をも含めた日本人移民による海外事業のなかでは最大規模のもの」と「当時の外務省記録に」記される程であったという。(p. 179)彼らの行ってきた事がどれほどユニークであったかは、メヒコの日本人移民全体の傾向を鑑みた時、明らかとなる。その為には、第二章を読んだ後、もう一度この章に戻るのが良い。(この辺りの章立てには工夫の余地がある様だ。この地域の移民の特殊性を理解する為には、第二章で語られる様な「多数派」の移民について知っている必要があるからである。また、第一章の記述範囲は一八九一年の榎本武揚の外務大臣就任から一九二〇年の日墨協働会社解散に及び、更に関係者のその後と同地域の別の移民(榎本殖民とは直接関係の無い小橋岸本合名会社など)までカバーしている為、時間的にも第二・第三章と前後している。また、第七節(pp. 240-244)は、内容的に見て第二章に含めるべきではなかったか。)

尚、同会社に関する史料として「会社日誌」や「社報」が使われている。これらの史料は、石田雄氏の『メヒコと日本人』(東大出版・一九七三年)で紹介されたことがあり、同氏に拠ると会社幹部であった有馬六太郎の子孫(チャパス州ウィストラ在)によって保管されていたという。メヒコに散在する、こうした貴重な史料が広く紹介されることは、喜ばしいことであり、同書の価値を高める事にもなっている。

〔第二章〕 大量移民の時代（一九〇〇—一九〇七年）

移民会社（熊本移民合資・東洋移民合資・大陸殖民合資の三社）扱いによる出稼ぎ移民は、足掛け八年間で約八七〇〇人に及ぶという。入植先は、主として、北部鉾山、中南部の砂糖耕地、コリマ州の鉄道工事現場であった。

榎本殖民団の解体やペルー移民の失敗の為、日本政府は移民送出にはひどく神経質になっており、現地との間に多くの外交文書が取り交わされた。第二・第三章の基本史料は、こうして残された「日本外務省保管の外交文書群」（「飯倉の外交史料館に保存されており、その一部分が『日本外交文書』として活字化されている。」）である。

この時期の移民の特徴は、一財産築いて国に帰るのを目的とする「出稼ぎ移民」という点で、実際メヒコ行き移民一人の殆どがこうした考えの人々であった。（榎本「殖民」の定住志向や日墨協働会社の日墨融合精神の全体の中での位置が判ろうというものだ。）稼ぐのが目的であるから、出来るだけ稼ぎの大きい職場を目指し移動する。その流れが北を向いていたのは、その先に賃金の高いアメリカ合衆国があるからだ。既に、合法的に米國本土に移民する道は閉ざされており、米國を目指す人々は、ハワイからの転航や地続きのカナダやメヒコからの密入国という手段を編み出したのである。

移民送出を商売とする移民会社の側から見れば、移民が逃亡し労働力が不足することは、次の移民を送ることに繋がり利益となる。また、予備人員と称して注文数以上の移民を送

るなどのウルトラCも演じて、飽くなき利潤追求を行っていた。

移民会社が需要以上の移民を送るから職が無くなりその地を去るのか、移民が逃亡するから多くの移民が送られるのか。こうした移民及び移民会社の動きを如何に説明するかが、この時期の移民問題を考える場合のポイントであり「卵が先か鶏が先か」の如き難問である。これまでの移民史の多くは、移民は貧しき棄民であるという立場から、劣悪な労働条件下で搾取され「やむを得ず」逃亡していったと説明してきた。

しかし、個別の事例が明らかにされつつある今日では、その様な一方的な説明は通用しない。同書では、個別事例を出るだけ多く紹介し、問題を多面的に浮き彫りにする事に成功している。炭礦労働者は「生命が絶えず危険にさらされ」ており、「労働拒否と移転という行動をとらざるを得なかった」（p. 311）という記述もあれば、移民は「アメリカ密入の路銀をあらかじめ用意して渡航」しており「なかには移民会社の誇大募集広告に翻弄された者もいただろうが、いつの時代にも、民衆の生きることへの感覚は鋭い」（p. 338）という記述もある。いささかカメレオンの如くで説明になっていないという批判もできようが、「移民による移民史」にこうした記述が見られる様になったことを肯定的に評価したいと思う。

〔第三章〕 移民過渡期と革命時代（一九〇八—一九一九年）

移民会社扱い移民は、一九〇七年に日米間に結ばれた紳士協定により終了する。前述の様に、日本人移民の多くがメヒ

コ行きを米国への密入国の手段とした為であった。

メヒコ国内を戦火に巻き込んだ革命（一九一〇年）が、日本人移民に与えた被害と影響は甚大であった。革命の火の手はメヒコ北部に上がり、主な戦場は北部の米国との国境地帯であり、一方、日本人移民は米国を目指す「北行習性」を持っていく為、必然的に日本人の大部分がメヒコ北部に集中していたからである。戦闘のため北部鉱山は閉鎖され、商業も成り立たず、糊口を凌ぐために軍隊（政府軍、革命軍を問わず！）入りを志願する日本人移民も多かった。こうした事態を政治的に憂慮した日本政府の指示による北部日本人の移住も実行され、革命は「北高南低」の日本人分布を崩す切っ掛けともなっている。

革命と日本人移民に関わるある事件が紹介されている。第三節「ビヤ暗殺にかかわった日本人」（pp. 398-404）がそれだ。一九一六年、北部チワワ州において、日本人移民四名が革命軍の首魁ビヤ將軍（映画などではパンチヨリビリヤとして知られる人物）を毒殺しようと試みた。結局、暗殺は未遂に終わったが、日本人に悪感情を抱いたビヤによって、翌年三名の日本人が報復として射殺されたという事件である。事件に関する史料が外交文書しか無く、事件の持つ意味を充分に掘り下げるのは難しい。寧ろ、本書がこの事件を取り上げたという事に、意義を見出すことが出来ると考える。

これまでの所謂「移民史」の多くは、一世が如何に苦勞して現在の繁栄を擲んだかの成功譚であり、個々の来歴の「光

の部分にのみスポットを当ててきた事は否めない事実である。これに対して、同書では、各地の日本人移民に「暗に寄付を依頼」し「成功談義」ばかりを記載した一九二七年刊行の移民史『大宝庫メキシコ』を名指して挙げ、(pp. 470・727) そうする事で従来の「移民史」のアンチ・テーゼとしての同書の立場を明らかにしている。この事を鑑みた時、『大宝庫メキシコ』では記述を避けたと思われる「二〇年代後半の日本人移民中随一の成功者」(p. 404)の起こしたビヤ將軍暗殺未遂事件に言及した事の持つ意義は自ずと明らかになるであろう。

#### 第四章 V 日本人社会の形成（一九二〇—三〇年代）

この時期、革命が一応の収束を見たことで、日本人移民もそれぞれの地に定住し、日本人会や日本語学校がつくられはじめた。また、排日運動の激化した米国カリフォルニアからメヒコを目指す日本人（南下組）が目立つ様になるのもこの頃である。しかし、一九二九年にはじまる世界恐慌の煽りで、メヒコ国内にも排日の動きが見られる様になる。さらに、日本の軍国主義の風潮がメヒコの日本人社会にも押し寄せ、その意味でも、各地の日本人会創立が急がれた。

メヒコの日本人社会のエポック・メイキングと言える時期であるが、研究は少ない。『日本外交文書』刊本の刊行がこの時期迄及んでいないことや、日本人会の組織内部の事情を語る史料は表に出にくいことなどが要因であろう。それだけに、外交史料館の史料を使い、且つメヒコ側の（日本人会

の)事情も知った上で書かれた同書には、大きな価値があると言える。

〔第五章〕 太平洋戦争前後(一九四〇年代)

太平洋戦争開戦によって、一部を除く日本人は全て、メキシコシティ及びグアダハラハラの二都市に強制移転させられた。これにより、日本人の分布は地方分散型から都市集中型へと変化し、その職業構成も農業中心から商業中心へと変わるようになった。

開戦前後の状況を語る史料は、各関係者の回顧録・インタビューの類が多く、細かな時期や事実関係などについての食い違いが散見される。インタビューに頼った従来の「移民史」でも、その克服は大きな課題であった。同書も、同様の課題を抱えていると見て良いであろう。個々の体験談の重さに引かずられ、全体像が見えにくくなるのである。

尚、戦時下シティに集められた日本人を、引き上げた公使館に代わって保護する機関として「墨都共栄会」があり、それが組織されたのは「開戦直後」(p. 542)とある。しかし、日米開戦翌日に日本人の銀行預金が凍結された時、被害が最小で済んだのは「それ以前に公使館や共栄会からの通知」があった為 (p. 560) だとあり、開戦前から共栄会が機能していた事になる。これは、もう一つの邦人保護機関である「在墨連合日本人会(連合会)」の誤りであろうか。

〔第六章〕 戦後——未来を見つめて(一九四五—八〇年代)  
同書の編集委員諸氏にとって最も重要であり、言いたかつ

た事が書かれているのがこの章であろう。この本の書かれた理由、書くにあたっての方針などが、垣間見られる部分である。ところで、同書の目次には、何故か本文と違うタイトルが付けられている。目次に書かれた第六章の見出しは「戦後・継承を唱う新しい波」である。続く各節の見出しは「われわれはどこからスタートしたか」(細かい事だが、本文では「どこからはじめたか」である)、「日系コミュニティ様々なる顔」「不和と対立の軌跡」「おやじに代わりゆく息子たち」「対立を乗り越えて」と並んでいる。新しい世代を迎えたメヒコ日系社会が、その宣言として送り出したのがこの『日墨交流史』だといえるのではないか。

この章では、具体的には「日本人が集まると必ず出来る」三種の神器」(p. 721)とされる日本人会・日本語学校・日本語新聞のそれぞれの歴史を語り、最後に、一九八七年に開催された「日本人メキシコ移住九〇周年記念祭」に触れて筆を置く。同書の編集委員(執筆者)は、日本人会長であり、日本語学校長であり、日本語新聞社主であり、移住九〇周年記念事業団理事である。それぞれの実体験に基づく記述であるだけに、迫力は一入である。

### 第三部 経済交流編

主として戦後の日本企業のメヒコ進出を取り上げた章である。進出企業のリスト的な部分が多いが、進出第一号である「メヒコ豊田(株)」の失敗例 (pp. 800-814) と、「武田薬品(株)」

の成功例 (pp. 815-816) を対比させ教訓を引きだそうとする部分などは、面白く読める。その教訓のひとつとして「当地の事情に詳しい日系コンサルタントの協力」の必要性を挙げている (p. 812) のだが、戦後、日本で開催されている「海外日系人大会」での日系人の主張 (例えば、昭和四十一年の第七回大会で、メヒコ代表は「企業進出に在留邦人を活用すべき」と発言している・『海外移住』1966年5月20日号より) などと思いを合わせた時、日系人が自分たちをどういう立場に置いているかが見えてくるだろう。

#### 第四部 文化交流編

佐野碩や黒沼ユリ子、北川民次といったメヒコで活躍する (した) 芸術家と共に、日系人による歌壇や日本文化紹介事業なども紹介する。更に両国でそれぞれの国がどのようにイメージされているかを、文学・映像・スポーツ (メキシカン・プロレスラー迄!) などによって解き明かし、最後に、メヒコに於ける日本宗教について触れている。

#### 第五部 資料編・日本人メキシコ移住九〇周年記念事業

移住九〇年を記念する諸事業が行われるに至った背景、記念事業準備委員会の構成、事業内容などを記録する章である。本書の刊行が、その事業の一貫であることは言うまでもない。

## 二、何故「交流史」なのか

後書きにある様に、同書は「本来、移民史として姿をあらわすはず」(p. 1142) であった。それが、この様な「一回り大きな交流史の形で構想される」(同) に至った事は、「交流史」上の一事件として大変興味深いことである。戦前派一世達の「自分たちの足跡を一日でも早く記録にとどめておきたいとする熱烈な希求」(p. 1) に答える「紙碑」(p. 2) としての「移民史」編纂を目指して始まった事業が、この様な形をとったのは何故であろうか。

第一に、人間の問題である。編集委員七人の顔触れを見ると、戦前派一世・二世・婦墨二世 (II 生まれはメヒコであるが、日本で育った二世) ・戦後派一世とバラエティに富んでいるが、実質的には二世と戦後派一世の側に主導権があった様だ。彼らの存在は「移民史」という枠には収まらない。メヒコ生まれの二世は「移民」ではないし、また、戦後派一世と呼ばれる人 (編集委員中では、大学卒業後メヒコに渡り現在では日本語新聞「にちぼく」の社主である荻野正蔵氏や、大統領顧問として渡墨し現在メヒコ国立自治大学の顧問を勤める妹尾隆彦氏など) は、自分たちを「出稼ぎ移民」とは違う文化的 (人的) 交流を担う者と位置付けているからである。そのため、従来の「移民史」的な部分に「経済交流編」「文化交流編」を追加することになったと言える。

第二は、時期の問題である。世代が交代し、メヒコに生まれ

ついた二世が日系社会の中心となっているのだという現状認識が、第Ⅱ部第六章に散見された。戦前派一世（出稼ぎ移民）にとっての日本は帰る予定が帰れなくなった故国であつたかもしれないが、二世にとっての日本は一番近しい交流相手国であり、その日本との交流の先方を担うのが自分たちであると認識しているのだ。特に、債務大国となつた近年のメヒコにとって、日本との経済交流は欠かせないものである。本書の第Ⅲ部「経済交流編」はこうした視点に基づいて付け加えられたと見ることが出来ないだろうか。本書全体を貫いて、日本とメヒコの切つても切れない深い友好関係が繰り返し強調されている事や、サリナス大統領がこの本を手に来日（一九九〇年六月）した事も、同書の持つ意義を端的に表している。将来的に見れば、ペルーの日系人大統領フジモリ氏の日本への経済援助要請やブラジルなどからの逆出稼ぎ移民の増加という事象と同様の文脈の中に、同書の刊行も含まれているのであろう。

### 三、『日墨交流史』の意義と価値

本書以前にも、日本とメヒコの関わりを総括的に扱った書は幾つか挙げられる（すでに本文中で何冊か紹介したが、その他に次の様なものがある。①『日本人メキシコ移住史』同編纂委員会（編）一九七一年…交流史の先駆とも言える本だが、誤植・脱字があまりにも多く、目次・奥付すら無く、編集も無秩序で読みにくい。②『近代メキシコ日本関係史』エンリーケ・コルテス（著）古屋英男他（訳）現代企画室・一九八八年…特に

明治時代の日墨関係について記した本。日本語史料は使いこなしていないが、メヒコ側の研究動向を知る事が出来る。）が、これほど網羅的かつ全般的に記述されたものは皆無である。ただ、それだけに、個々の事象が断片的かつエピソード的で全体像を掴みにくくしているという憾みが残る。しかし、メヒコにありながら、しかも委員それぞれが他に要職を抱える身で、これだけの史料を集めたという事は、称賛に値する。日本外務省の外交文書にしても、日本とメヒコの関係を語るもので本書の調査から漏れているものは殆ど無いと言えるのではないか。

翻刻ミスや、史料の読み違いからくる事実誤認は、残念ながら何箇所か指摘出来るが、決して本書の価値を貶めるものではない。一例を挙げれば、一九〇四年の東洋移民合資会社による最初のボレオ銅山行き移民の帰国騒擾事件を扱う本書三〇四頁で、帰国した移民の「総代」として「田中、和田、井口の三人」を提示しているが、『日本外交文書』第三十七巻第二冊四〇〇頁の文書には「移民等ハ田中又吉外六名ヲ総代トシテ（中略）和田彦主人井口三吉同道ニテ会社ニ出頭」とある。「和田彦」は横浜の旅人宿の屋号であり、移民手続き等を請け負っていた。その主人が「井口三吉」である。

この点とも関連することであるが、典拠となつた史料や引用・参考史料を示す「註」が無い（同書の最後に一括して記載）のは残念なことである。一九一七年、日墨間に「医師自由営業協定」が結ばれた。これは、それぞれの国での医師免許があれば相手国での自由な開業を認めるという協定で、本書一二九頁



に拠るとこの協定で渡墨した日本人医師は二十五名である。しかし、日本外務省発行『移民地事情』第二十二卷（一九二九年刊）の六二頁には同協定で渡墨したのは「約七十名」とある。「二十五名」の典拠となった史料を知りたいと思う所以である。

また、人名索引のみ（索引から欠落している人名も多い）でなく、地名・事項索引もつけたならば、更に価値ある一冊となったのではないか。内容的に、そうした使用にも充分耐えうる書であるだけに、尚更悔やまれる。

#### 四、今後への展望

従来の「移民史」へのアンチ・テーゼとして本書が主張する事のひとつが、編集委員のひとり春日カルロス氏の次の言葉に示されている。「従来、交流史とか日本人移民史とかには、表現形式が日本語である以上、日本側から一方的に発信される見方、考え方が多く、その点においては充分な交流・移民史にはなり得ない（中略）そろそろスペイン語で発信し、メヒコから発信される歴史書が生まれてもいいのではないか」（p. 1314）。残念ながら、本書は、氏の意図したところを十全に物したとは言えない。（瑣末な事ではあるが、地名等の現地語表記が殆どなく、スペイン語の校正ミスも多い。また、索引の見出しはBとVやSとZを分けてあるが、カタカナ表記の人名索引にそうする意味があるのだろうか。）しかし、それは寧ろそこに向かう過渡期にあるためであろう。春日氏の言う様なビジョンによ

ってメヒコ側からの研究が進み、日本側での研究も競合し、その先に新しい「交流史」が生まれる事を願って止まないものである。

（PMC出版、一九九〇年五月、一一七四頁）

定価一三三六〇円〔本体一二〇〇〇円〕